

審査結果の要旨

本論文の内容は、公開審査（平成 27 年 2 月 24 日 10 時 30 分から 12 時 30 分、文学部会議室）において説明がなされ、質疑応答が行われた。笠松論文の研究史上の意義と審査会で出された論点は、以下のとおりである。

○研究史上の意義

本論文が達成した研究史上の意義は、以下の三点にまとめられる。

第一の達成は、数ある唐代封禪のそれぞれの構造と性格を、はじめて精細に明らかにしたことである。従来の研究では、唐代の封禪をほかの王朝のそれと対比して、大づかみに性格づけることはあっても、封禪の儀礼構造、およびそれと関連する諸問題をあわせて本格的に考察することは少なかった。これに対し、本論文では、唐代封禪の歴史的な位置づけを明確にし、そこに内在する政治文化・イデオロギーを立ち入って分析した上で、当代中国における王権の性格を表象したものと指摘することで、唐代政治史をみなおす新たな視座を開いた。

第二の達成は、上の作業を通じて、唐代封禪の儀礼をはじめて構造的に解明したことである。ほかの時代・王朝とは異なって、唐代の封禪においては、「朝覲礼」が加わり「四礼三部構造」となった事実、および、それが有する歴史的な意義を指摘した。封禪儀礼が示した「天下」の範囲とは、唐代の前期においては、唐王朝と周辺諸族が会盟した空間であって、従来の王朝支配・皇帝権力の空間範囲とは異なっていた事実を明らかにしたことは、重要な成果である。

第三の達成は、その封禪儀礼が三たび挙行されなくてはならなかった史実経過とその歴史的意味を解明したことである。そのさい、中間に位置する則天武後の嵩山封禪が、決定的に重要であって、その意味するところは、皇帝の天下支配に仮託した「金輪王」の「四天下」君臨という、女性皇帝たる武後の異例な王権のありようを表象したことにあると指摘した。

そのうえで、さらに玄宗の封禪と礼制改革が、それを修正し、唐王朝中興にともなう「天下」秩序の再編を企図せねばならなかった史実経過、またその手続きと担い手の特質を明らかにして、玄宗以後の王権のありようを展望した。以上は、これまでの研究では論及され得なかった、本論文の独創的な貢献である。

本論文は以上三つの達成を通じて、従来の中国の国家祭祀研究、および唐代政治史研究が重視してこなかった唐代前期の三封禪をつぶさに検討し、そこから封禪という祭祀儀礼の歴史的意義のみならず、当時の王権の性格をも明らかにして、いっそう普遍的な王権論を構築する可能性をも示した。本論文は、こうした成果によって、中国唐代の政治史研究を大きく前進させるとともに、今後さらにひろく、祭祀・イデオロギー、儀礼・王権と政治過程・権力構成との相互関係を解明していくうえで、大きく貢献するものとなると考え

られる。

○審査会でとりあげられた主な論点

はじめに・第一章

- ① 研究動向の整理が一面的。とりわけ「王権」論の展開。
- ② 「四礼三部構造」の是非。元会儀礼・会盟儀礼と君臣関係。
- ③ 祭場変化の意義について。東岳・泰山から中岳・嵩山。
- ④ 封禪の企画者・主導者。魏徴の出自など。
- ⑤ とりわけ朝鮮半島方面における外的要因の比重。「天下」秩序の構造。

第二章

- ① 「天下」概念の不分明。「天下会同」と「四天下」の「天下」。
- ② 「弥勒化生」「弥勒下生」の意義。女性皇帝と李唐の超克。
- ③ 武後のイデオロギーと『大雲経疏』。封禪に関わる担い手、前代・後代との対比。

第三章・おわりに

- ① 唐代宗廟制の内容と変遷。正統性の再構築。
- ② 太原の北都化の意味。
- ③ 「再受命」の論点。先行研究との関連、先例との対比。
- ④ 張説ら新興科挙官僚出現の過程と意義。宰相府と集賢院。
- ⑤ 玄宗封禪の「天下」概念。前代との対比。
- ⑥ 権力構造の展開。「王権」のゆくえ。

本論文には、形式の不備、学説史整理・論点究明・論旨展開の不徹底や史料解読・概念操作に関する疑問などが少なくない。しかしながら本論文は、従来の諸研究では十分な検討がおよばなかった封禪という儀礼の構造と性格をつぶさに解明したうえで、それに関わる祭祀・宗教・世界秩序・官僚制など、唐代のさまざまな歴史事象をみなおし、またあい関連させることで、唐代前期の王権の全体像を刷新しようとしており、唐代政治史研究の最新の到達段階を示すものである。

よって、本委員会は、本論文が博士（歴史学）の学位論文として価値あるものと認める。